

緑葉の 神泉 薫

今朝 あなたを縁取っていたものを 数える ひとつひとつの 透き通った滴たち 丸い宮殿には 日々の漣を潜りぬけた 循環という名の営みだけが 映し出されている 傘を打つ 雨音を慈しむ 弾けるリズムは あの空からの伝言 遠い血の 積み重ねられた息のひとつを 覚えている 行と行の狭間に落とされた鳩の足跡 確かな飛翔が 地球の回転の わずかな傾きに寄り添っていたことを

わたくしたちの眼裏に 刻まれてゆく緑葉の 指折り数える四季 いくつ巡ったか 幻の 幼い指は いつまでも折れることに戸惑い 山梔子の香りに満ちた あてどない永遠に 魚がれたまま



夢のなかの (メイファ) 小島きみ子

(メイファ)は、私の本当の名前です。 お別れのとき梅の花の繻り香水を渡してくれたあなた。 二月の風はまだ冷たくて、春を祝うという日曜日の朝。 公民館の厨房で、私達はいつたい何厨の餃子を作ったの だろう。あなたの中国人の恋人であった男性も手伝って くれた。あときはもう、結婚していた仲良しの二人。 彼に中国の国籍を棄てさせて日本で結婚したあなた達。 眩しいほどのエネルギーに充ちていた (メイファ)。 彼は言う。 日本の同じ年齢の男には負けないさ。だから仕事を辞め て家に居て欲しい。あなたから彼女に言っただけで。朝 ご飯を作るのも、彼女の弁当を作るのも僕ですよ。どう して彼女は、家に居ないのでですか？ 彼女の中国語は、 北京では通用しなかったのです。彼女の母親の北部の言 葉は田舎言葉で、柳の漢民族の言葉とは違うからです。 だから、僕が彼女をサポートしていました。僕は中国の 父と母を棄てて日本へ来た。僕たちの子供も生まれました。 僕の両親が死んでも中国へは帰ってない。何故、彼女は 僕のことを考えないのですか？

(メイファ) あなたと彼は、どこですれ違ってしまった の？ あなたの子供は北京語と日本語が話せて、小学六 年生で漢字検定準一級に合格した。有名私立高校へ進学 するというのが、あなたと長男の目標でした。けれども 長男は志望高校へ進学できませんでした。普通の高校か ら普通の大学へ行っても、子供は幸福になれるのよ。と 言うと、本当ですか？ と、驚いて訊き返す。 正直になるってどういうことですか？ 私は一生懸命や りました。働いて子供を一生懸命育てました。豊かな暮 らしができるように。両親に業をしてもらえるように。 でも、両親はせっつく長生きしたのに、最期は老衰でし た。子供を学校で一番にさせたかったのに、試験に落ち て彼は目標を無くしてしまいました。今はアルバイトを しています。勉強をしたくないのです。勉強をしなくな るまで待ちます。あんなに愛していた夫は、私から離れ ていきました。私達は別れました。子供も夫も此処には 住んでいません。私は此処で待っています。悲しいです。 思い出がこの家にはたくさんあります。楽しかったこと も、悲しかったこともたくさんあります。

(メイファ)。夢のなかであなたの名前を呼ぶ。 私の仕事を助けて通訳してくれたあなた。私と一緒に 企画書を作って、幾つもの会議に出た。遠くまで車で行 き、道に迷ってしまった時、すきなアイデアを出した あなた。何も知らないは寧ろ私の方だった。私たちは いつも次の仕事を考えていましたね。あの時のあなたは 光にあふれていた。眩しい存在でした。遠くまで届く低 い声で (メイファ) もう一度あなたの名前を呼ぶ。梅の 花のよい香りが出て、あなたは穏やかに振り向いて微 笑みかえす。大丈夫です、と。

沈む綿毛 酒見直子

名前を返そうと思う そう言っ て 与えられていた名前を返して 何者でもなくなつたあなたは 何もかも捨て去つたのに 何もかも得たような顔をして 微笑んでいました 言葉を返そうと思う そう言っ て 積み重ねた言葉を返して 空っぽになつたあなたの中には あなたを包んでいた空間が 流れ込んでいきました

――「私」をなげ出した先の 美しいものが見たかった 言葉の次に体を返して なくなつたということも なくなつてしまつたのに この町にひとつだけある空地で タンポポの綿毛のように 淡く光っているのは 紛れもないあなたなのでした (あれがタマシイというものでしょうか) 雲のない青空の深い淵へ 綿毛のようなタマシイが沈んでいきます 名前を与えれば 空に根を張ってくれるかもしれない 手を伸ばしてくれるかもしれない そう思いながらも 永遠の中へ沈んでゆくのを送るのが 私のためひとつの役目だったので



メダカとヤモリ 坂多瑩子

それは今朝のこと 十年近く生きてメダカが沈んでるし ヤモリが感電して電車を止めちやうし 皿を洗いながら あれこれ考えていると あれこれ感傷移入しちゃって 巨大化した メダカとヤモリに襲われた まあ そういうこともありかもしれない 物語 ひとつでできた 詩に書こう 負けるもんか なんて云いながら なたは巨大化する メダカとヤモリも巨大化する あたしはもつと巨大化する もつともつと 地球からだつてすべり落ちてやる ね すこいでしょ



アサガオの人 久野雅幸

強いま昼の日記しのもと アサガオの人が 日傘をさして 立っている わたしは思われた そのように いろいろ傘の中に本当に顔があるのだろうか わたしには思われた わたしが何かを言つたわけでもないのに すれちがうとき その人が言った (もしかしたら その人を見るわたしのまなざしが その人に何かを感じさせてしまったのかもしれない)

顔は ちゃんと ありますよ たとえ それが あなたには 見えないとしても ね そうして 続けた

――こちらが 相手を 求めているとき 顔を見せる 必要が いったいどこにありますか

からむ ―― とは植物由来のことばなのではないだろうか うかつてまなざしを向けるとそれによってからまれることが 時にあるけれども アサガオの人は やつぱり からみやすい人なのだろうか とはいえ ―― アサガオの人は その時 それ以上からむことなく たち去つた 日傘のうちにあるのだという 不明の 顔をとまなつて



(ともすればアンダーグラウンド) ほか

(ともすればアンダーグラウンド) ともすればアンダーグラウンドからの 埃まみれの逆光線を 一揆へと駆け上がる動詞の勢いが流民たる変異体でジオコ 《空き家》だ、灰白色の額縁に《囁みつけ》スタジオ！ 《白い歯》でロ・ジంగాレリリの言語地形の急勾配を登りつめる 手負いの健脚は稲妻のヒゲだろ、 ここでマック・アワーの豹皮の焦点を炙りだす メタボリメタリック・シンドロームの闇はだだっ広い

【補註】《空き家》、《囁みつけ》、《白い歯》、いずれもリトニア出身で ポーランドの画家スタニス・エイドリググイチウスの作品名、いずれ の作品にも二〇一九年秋、武蔵野美術大学の美術館で勇躍対面した。

身元確認 池田 康

身元確認できるものはないにもありません 名前もなく 親兄弟もなく 故郷もなく 横たわる死体の無言 忘却に委ねられ 土に 風に 空に すみやかに溶けるべく 右手に握りしめている約束や悲願は発見されず どこを歩いてきたかを靴は語らず 太陽は動かぬ眼珠を検分する 行き場のない骸は 宇宙に浮く 私はだれなのか 答えはない 喉が渴いて渴いて 死にそうだと死体が訴えると 宇宙は笑いながら闇を流しこむ 存在はすべて闇に溺死する 星も 命も 記憶も 闇はなにものでもない 闇は名を拒も、源 宇宙の身元も 闇の闇の闇 闇に還る死体は ひよつとしたら 宇宙の身元を知る のか 証言台に立て 完全無欠の疑問符よ 死体とは 宇宙の身元確認調査におもむく 不遜な旅人

